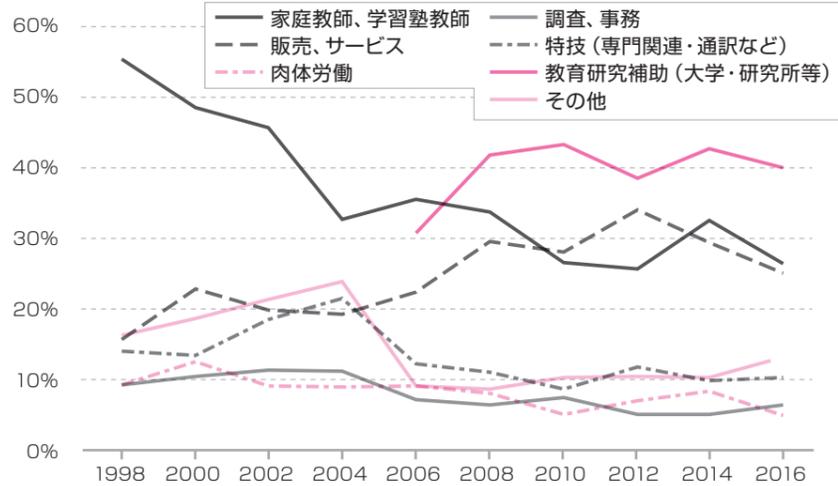


グラフで見る名大生 [10]

名大生は、どのような職種のアルバイトをしているのか？(大学院生)

「かわらばん」第72号(2020年秋号)において学部生のアルバイト職種に着目しました。その記事と比較しながら、今回は、大学院生のアルバイトに焦点を当てます。グラフは、大学院生が行ってきたアルバイト職種の变化を示しています。アルバイト従事者は、「家庭教師、学習塾教師」、「販売、サービス」、「その他」などの選択肢から、職種を選びました(三つまで複数回答可)。



グラフをみると、1990年代の終わりから、「家庭教師、学習塾教師」が減少していることがわかります。この傾向は学部生と同様です。一方、学部生と比べた時に、大学院生の従事率が高い職種として「教育研究補助」を挙げることができます。「教育研究補助」は2008年以降、最も従事率が高い職種であり、40%程度で推移しています。こうした背景には、TAやRA制度が普及していることが考えられます。「教育研究補助」は2006年に新設されましたが、2004年までは、「特技」や「その他」の従事率が比較的高いことから、「教育研究補助」に該当する仕事は、これら二つの職種に区分されていた可能性があります。(藤井利紀)

【データ】各年度の「学生生活状況調査報告書」を参照。大学院生の調査が行われるようになったのは、1998年(第18回)から。調査年度によって職種区分が異なる場合があり、グラフの作成の都合上、職種区分を再編したところがある。

2020年度学生論文コンテスト結果発表

- 応募15名の中から下記5名に賞が贈られました。
受賞論文は名古屋大学学術機関リポジトリにてご覧いただけます。
- 優秀賞「現代日本社会における「自己」の様相—象徴としてのマスクから」 法学部 天野 大輝さん
 - 優秀賞「主体的にさせられる生徒たち」 教育学部 杉山 和希さん
 - 優秀賞「夫婦同氏制度は憲法上男女不平等か」 法学部 渋谷 大良さん
 - 佳作「大学受験をする高校生の進学塾に対する評価とその形成要因」 教育学部 藤井 香帆さん
 - 佳作「部活動の所属と学業成績の関連性についての分析」 経済学部 守内 優斗さん

かわらばんへの皆さまの「意見・感想」をお寄せください
Eメールアドレス info@cshe.nagoya-u.ac.jp

新任教員の方々へ

高等教育研究センターでは、学内事務局のご協力により『名古屋大学新任教員ハンドブック』をウェブ公開しています。どうぞご利用ください。



www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/handbook_2020.pdf



学びを組み立てる力

昨春に突然にはじまったオンライン授業のために、学生がみずから学びを組み立てる重要性がより強く認識されたこの一年だったように感じます。学生へのアンケートや成績を見るかぎりは授業が一定の成果を挙げていたことに安堵する一方で、「ダラダラしてしまう」「課題を溜めてしまふ」という学生もいる現状が課題として浮かび上がりました。

「主体的な学びを促す」というおまじりのフレーズがふくむ矛盾です。また、よくあるジレンマとして、自主的な学習を管理する

矛盾とジレンマ
まず押さえておきたいのは、「主体的な学びを促す」というおまじりのフレーズがふくむ矛盾です。また、よくあるジレンマとして、自主的な学習を管理する

OECD「学びの羅針盤」
このような考え方は、「コロナ禍以前からすでに世界の潮流と

高等教育研究センター

かわらばん

春号

名古屋大学
高等教育研究センター
ニュースレター第74号

なっています。たとえば、経済協力開発機構(OECD)が2年前に提案した「学びの羅針盤」。羅針盤(Compass)という言葉には、教師からの決まりきった指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境において自力で歩みを進め、みずからが責任をもって、有意義な方法で進むべき方向を見出すことが学習者には必要であるという意味が込められています。

大切なことは、これが評価の枠組みでもカリキュラムの枠組みでもないこと、そして、見通し行動振り返りのサイクルが求められている点です。ちなみに、この羅針盤が指し示すのは、私たちが望む未来のための教育です。内実は時とともに移り変わっても、私たちが個人にとっても社会にとっても幸せであるような

未来を望むことには変わりはないからです。

PhDスキルフレームワーク

じつは、名古屋大学にも似た「コンセプトの枠組み」があります。博士課程教育推進機構(以下、博士機構)のPhDスキルフレームワークです。専門性をさまざまな環境で生かすためのスキルを大学院生が獲得することを促進・支援する目的で、2年前に作成されました。

このフレームワークは、有用なスキルを大学院生に自覚してもらうための参照枠であり、指導する教員にとつての検討基盤ともなるよう、設計されています。博士機構ではさらに、フレームワークを活用してスキルを伸ばす機会を見つけられるシステムも開発しています。

今後の大学教育は、学生がみずから学習を組み立てていく力の育成をより一層重視していくことになるでしょう。そのときに必要なのは基本となる方向性を重視すること、つまり共通の羅針盤なのではないかと思えます。学内の大小様々な取り組みが大きなうねりになるよう、高等教育研究センターとしても支援していきたいと考えています。

(齋藤芳子)

なのですが、学習ポートフォリオとは本来、学習者が他者の目も借りながら自らの学びを組み立てていくものです。教養教育院のe-portfolioはまだ開発途上ですが、このような方向を意識しながら、日々議論が続けられています。

羅針盤を共有する

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

機関別認証評価

Institutional certified evaluation and accreditation

機関別認証評価は、国公立の全ての大学が7年以内に1回の受審が義務づけられている評価制度です。評価主体は文部科学大臣の認証を受けた評価機関であり、大学の機関別認証評価機関には、大学基準協会、大学改革支援・学位授与機構、日本高等教育評価機構など5機関があります。大学評価の方法には大きく自己点検評価、外部評価、第三者評価の3つの方法がありますが、機関別認証評価は第三者評価にあたります。

大学評価は、大学を取り巻く環境変化と密接な関連があります。大学進学率の上昇と大学数の増加は、大学の質保証に関する社会からの関心を高めました。1991年の大学設置基準の大綱化の際、自己点検評価が努力義務化されると、1998年に自己点検評価と評価結果の公表が義務化され、大学が学外の評価者に依頼して行う外部評価が努力義務化されました。その後、2003年の学校教育法改正により、大学と独立した第三者機関によって行われる評価である機関別認証評価が導入されました。自己点検評価や外部評価では、大学が評価項目を定めますが、第三者評価では評価項目や評価方法を第三者機関が決める点が特徴です。

2004年から始まった機関別認証評価は、2004年から2010年の1巡目、2011年から2017年の2巡目を経て、現在2018年からの3巡目に入っています。1巡目では広範な大学の活動を評価していましたが、2巡目では教育面以外の活動の評価を簡素化するとともに教育の内部質保証の観点が増え、3巡目では内部質保証に重点を置いた評価項目となっています。認証評価制度の趣旨は、大学が恒常的に自己点検と改善を進め、その集大成として7年に一度受審するという自律性の尊重でした。しかし、認証評価の受審年にのみ自己点検を行うような事例や、点検結果をふまえた改善が十分でない事例が問題視されたこと等を背景に、内部質保証による継続的な点検と評価の取り組みが重視されるようになりました。

教育活動の成果や質は現場の教職員が最もよく知っているものですが、現場の経験を文書で表す労力は膨大です。効率性を重視すると、評価担当教職員を中心に学生調査や規程類の整備など認証評価基準をクリアできる資料を整えて受審することが合理的になってしまいます。できるだけ現場の経験を反映できる根拠資料の収集方法を開発することが、今後の課題といえます。(元スタッフ 中島英博)

欧州大学協会(EUA)は、2030年に向けた活動計画「障壁なき大学—2030年に向けたユニバーシティー without walls. A vision for 2030」を2021年2月に発表しました。

EUAは、ヨーロッパ48か国の800校以上の大学で構成する団体です。欧州を競争力のある活性化した社会にするという方針の下、大学のガバナンス、研究と教育の質の向上をめぐり、研究活動を行うとともに、シンポジウム・セミナーや各種出版物を通してその成果の共有を図っています。

活動計画「障壁なき大学」は、今後10年間に欧州の大学が進むべき方向性を示したものが筆頭に掲げられていること

学習・教育、研究、イノベーション、文化の4項目およびこれらの相互関連性は、今後とも欧州諸国の大学の重要な特徴であり続けると指摘したうえで、項目ごとに目標を掲げています。4項目の重要性は等しいとされていますが、学習・教育が筆頭に掲げられていること

学習・教育では、創造的・批判的思考力、問題解決力、科学的方法と職業能力を備え、積極的に社会参加し活動的で責任ある市民の育成を掲げています。

研究活動では、社会諸組織との連携と純粋な知的関心に駆動された研究の同時志向、研究成果の公表や専攻領域間交流の促進、研究倫理遵守と研究者養成等をあげています。

イノベーションでは、幅広い組織との共同・エコシステムへの配慮、研究者と学生による学際的チームの結成・企業的精神の習得が重要としています。

文化では、大学はその創造・普及の場であり、文化財・知識・伝統の保護、多様な文化言語の研究、多様な文化的背景の人々との交流協働の場であり

欧州大学協会が2030年度に向けた活動計画を発表

は注目されます。

学習・教育では、創造的・批判的思考力、問題解決力、科学的方法と職業能力を備え、積極的に社会参加し活動的で責任ある市民の育成を掲げています。

研究活動では、社会諸組織との連携と純粋な知的関心に駆動された研究の同時志向、研究成果の公表や専攻領域間交流の促進、研究倫理遵守と研究者養成等をあげています。

イノベーションでは、幅広い組織との共同・エコシステムへの配慮、研究者と学生による学際的チームの結成・企業的精神の習得が重要としています。

文化では、大学はその創造・普及の場であり、文化財・知識・伝統の保護、多様な文化言語の研究、多様な文化的背景の人々との交流協働の場であり

近刊紹介



ブルース・マクファーレン(著)
齋藤芳子、近田政博(訳)
『知のリーダーシップ
—大学教授の役割を再生する』
(玉川大学出版部 2021)
大学教員のリーダーシップは、マネジメント一辺倒よりもっと豊かなものであるはずと、強く訴えかけてくる本です。

続けるつもりです。

これらの実現方策として、地域レベルで法令と財政の両面の整備をすること、適切な投資を行うこと、各学長等が強いリーダーシップを発揮すること等を掲げています。(名誉教授 夏目達也)

センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせしています。本サービスへのご登録は、下記ウェブサイトよりお申込ください。
www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/info_form/

読んでおきたい

この1冊

Great Books on University

『授業をどうする! — カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』

B.G.デイビス, R.ウイルソン, L.ウッド 著 香取草之助 監訳
東海大学出版会 1995年

本書は、副題にもあるように、カリフォルニア大学バークレー校において、大学における授業改善のために実際に教員が行ってきた事例をまとめたものです。内容は2部からなっており、第1部は授業改善のアイデア集で、第2部ではMinute Paper について紹介しています。第1部は8章からなっています。第1章授業改善のための10の戦略においては、講義シラバスを用意すること、講義日誌をつけること、講義ノートに改訂すること、学生の教科書を読み返すこと、教科書を補強するために講義資料プリントを配布すること、講義で取り上げる

トピックスに記録を蓄積すること、などがあげられています。講義シラバスの準備や講義資料プリントを配布することなどは、日本の大学でも当然のように実施していますが、毎回の講義で講義日誌をつけることまで実施している例は少ないのではないのでしょうか。本書では、それをもとに講義ノートを毎年全面的に改訂することについても述べています。第2章科目の位置づけ、第3章授業の流れと展開に続いて、第4章魅力ある授業展開においては、クラス・ディスカッションを奨励することや話すスピードやトーンを変えることなどが紹介されています。

第5章自発的に学ばせる方法に続いて、第6章学生との接し方においては、学生と個別面談することの必要性が様々な形で述べられています。その中には、学生と昼食を一緒に取ることなど、日本とアメリカの習慣の違いもあって多少戸惑う方法もあるかもしれませんが、学生一人一人と関わることの大切さを指摘しています。第8章は理解度の確認で、これは第2部に続く内容となっています。

第2部でとりあげているMinute Paperとは、元々はバークレー校の物理学教員が実施していた方法で、講義の最後の1分間に「講義におけるポイントと疑問点」を記載させます。これを評価することによって、授業内容を学生が理解できているかどうかを確認できるので、授業改善に役立てることが出来ます。

本書は、1995年に初版本が出版されていますが、そこに書かれているテーマは、現在の大学教員が直面していることと大きく変わりません。現代においても役立つことでしょう。(北栄輔)

高等教育研究センタースタッフ (2021年4月現在)

センター長	北 栄輔 専門領域: 情報学、機械工学、計算科学	客員	YANG, Cheng-Cheng (台湾 国立嘉義大学)	名古屋大学高等教育研究センター
教授	加藤 真紀 専門領域: 高等教育学、国際人口移動、知識創造		WAN, Chang Da (マレーシア マレーシア科学大学)	〒464-8601 名古屋市千種区不老町
准教授	丸山 和昭 専門領域: 教育社会学、高等教育論、専門職論		田口 真奈 (京都大学高等教育研究開発推進センター)	Tel 052-789-5696
助教	齋藤 芳子 専門領域: 科学技術社会論		杉森 公一 (北陸大学高等教育推進センター)	Fax 052-789-5695
研究員	藤井 利紀 専門領域: 教育史、高等教育論		田中 正弘 (筑波大学大学研究センター)	E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
				URL www.cshe.nagoya-u.ac.jp